

松本脩作編著

『インド書誌 明治初期～2000年刊行邦文単行書』(東京外国語大学大学院21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」研究叢書)

東京外国語大学「史資料ハブ地域文化研究拠点」本部
2006年 ix + 452ページ

きとう ひろし
佐藤 宏

本書のページをくるなかで、評者には、渺々と水をたたえた貯水湖のイメージが、ふと湧いてきた。本書で行われているのは、まさに一大貯水事業である。編著者は、この事業に、おそらく40年近くの年月を費やされたのではなからうか。明治初期以来、今日まで約1世紀半にわたる日本人のインドへの関心の広がりや深さが、5820点という圧倒的な点数をつうじて読者に迫ってくる。それゆえ、本書は、日本とインドの関係を、少なくとも150年の深みをもって考えることを私たちにうながす。このような書物に出会えたことに心から感謝し、著者の真摯な努力に深い敬意を表したい。

本書の圧倒的部分を占めるのは、いうまでもなく5820点を収録した第1部の「主題別リスト」である。目次にしめされた分類は、途上国、とりわけ南アジアの事情を加味して考案されたもので、編著者が長らく勤務されたアジア経済研究所図書館での図書分類が下敷きであろう。その網羅性は、分類が政治、経済、社会、歴史といった当然予想される分野をはるかにこえて、「料理」や「小説」、「性文献」にまで及んでいることから理解できよう。採録を除外したのは、編著者の「序言」によれば、山岳・登山のほか、仏教書、経典、仏伝などであるが、仏教史論や、サンスクリット、パーリなどの古典語と交錯する多くの研究成果は、きちんと盛り込まれている。

また、分類の最末尾には「雑誌、紀要、学会誌」の項目が設けられている。この部分には、インドに関わる日本での組織的な活動の歴史が反映されている。編著者がここ数年間、欠号の発掘に尽力された、戦時中の『総合インド月報』や戦前からの日印協会関連の定

期刊行物もここに含まれている。

第2部、第3部はそれぞれ、書名および著者名索引である。2つの索引の編成にも、編著者のきめ細かな配慮がうかがえる。例えば、カナ表記における外国人名の不統一を生かしつつ、かつ原著者名の英文で引けるような工夫がなされている(そのために邦文文献目録でありながら著者名配列はすべてアルファベット順である)。こうした配慮にもとづく巻末の書名索引と著者名索引を駆使することで、読者は目標とする文献に的確に到達することができる。

編著者による作業のきめ細かさや綿密さは、本書では随所にうかがうことができる。まず、これも「序言」にいわれるように、ここに採録されたものはすべて「存在を確認」されている。これは大変な作業である。所蔵機関・図書館名は「稀少な文献で所蔵が唯一そこでのみ確認できるもの」(凡例)についてのみ記載されているが、確認のために訪れた機関は想像をこえる数にのぼるであろう。

また、採録対象の幅広さに加えて、本書では、同一図書でも、出版社や版の大幅な変更があるものがきわめて克明に、すべて確認され採録されている。さらにいえば、編纂の途上では、おそらく分類上の困難にも遭遇されたに違いないが、表題からでなく内容で分類されていることも察せられる。当然といえばそれまでだが、本書では「現物」にあたるという良心的な姿勢が一貫して貫かれているのである。

「序言」のなかで編著者も強調されているように、編纂上の努力が特に注がれたのは、明治期、大正期、そして戦前の昭和期の著作の確認作業である。本書の大きな成果のひとつが、この戦前期のインド関係書誌にあることは疑いない。ここには、編著者が東京外国語大学の藤井毅教授とともに発掘、整理された第2次大戦下インドの抑留日本人関係の資料が紹介されている。

この「貯水湖」から私たちがうける恩恵ははかりしれない。本書にくまなく目を通せば、私たちは限らない発見に出会うであろう。最後に、評者としては、編著者が長らく勤務されたアジア経済研究所の図書館部門に携わる新たな世代が、ぜひとも本書を手にとられることを、切に望みたい。

(南アジア研究者)